



コーディネーター	橋爪 紳也	(大阪市立大学都市研究プラザ教授)
パネリスト	横山 葵	(NPO法人「人と自然とまちづくりと」理事長)
〃	瀬田 史彦	(大阪市立大学大学院 助教授)
〃	田端 和彦	(兵庫大学 助教授)
〃	大谷 新太郎	(阪南大学 助教授)

(順不同・敬称略)

橋爪 まず、それぞれの分科会での感想や課題をお願いします。

横山 第1分科会は「未知普請・地域協働」をテーマに発表していただきました。特に「未知普請」という側面で、日本人の持つ精神面での美しさを感じました。中辺路も井手町も風景自体が美しいのですが、日本で古くから行われてきた自然と人々との関係、心温まる営みの美しさを再び見直す活動に取り組まれているご報告でした。また、「みちカフェ」のみなさんは、「苗を植えて、森を創っていく」という新たな手法に挑戦していらっしゃる。いずれのグループからも、お茶やお酒を囲みながら、兄弟や家族のように話し合いを重ね、地域の課題の解決に取り組んでいる様子が伝わってきました。

「伊吹の源流を考える会」の報告から地域協働は、住民と行政とが、お互いの限界を自覚しながらうまく連携していくことが大切だと再認識しました。特に、地域と密着している市町村が、問題点や求められていることを的確に国に理解を求めることで、地域が地域らしく活性化すると報告がありました。その報告を受けて会場の人から、基本となるのはまず話し合うことという発言があったのが印象的でした。地域協働も次の段階に来ていると感じました。

瀬田 基調講演でも路面電車を新設したフランスのストラスブールの事例が出ていましたが、路面電車を走らせたことだけが単体で先進的なのではなく、さまざまな政策が有機的に結びついて、まちに活気をもたらしている点を見逃してはいけないと思う。第2分



横山氏



瀬田氏

科会「都市再生」で発表していただいた4グループの取り組みは、いずれも、ひとつの問題点をただ解決するだけでなく、多様なメリットをもたらす活動となっている点がすばらしかった。例えば、あいりん地区の取り組みでは、宿の需要が減ったから、ターゲットを外国人旅行者に切り替えるのではなく、観光振興を結びつけたり、社会的弱者の雇用機会の創出へとつなげてようとしている。ほかのグループの活動も、複数の目的を非常にうまくつなぎ合わせていると感じました。

田端 「コンパクトなまちづくり」や、中心市街地活性化の動きの中で、地元にある資源を生かす活動が活発になってきています。第3分科会「市街地活性化」の発表でも4グループからの発表がありましたが、住民が地元の資源を発見し、生かしていこうという自発的な思いから活動がスタートしていて、その結果、勝手連的に活動を続けているという共通点がありました。その結果、属人的に陥る傾向があり、今後、活動する方々の高齢化が進んだり、また資金的な面でも先行きが不安定な面があります。今度は、せっかくの活動が硬直化しない程度に、どう制度化していくのが課題だと感じました。

もう一点は、「コンパクトなまちづくり」が、結果的にある程度の規模の住民運動にまで広がっていくケースが多いということ。堺市の場合は研究会の活動が商業の活性化まで広がっているし、貴志川線存続については、マスコミの影響もあったが、現在は数千人が参加するレベルになっている。この広がりとは、先ほどの制度化ということとを組み合わせ、せっかく軌道にのった活動の根を絶やさずに継続していくための方法を考えていかなければならない時期に来ているのではないのでしょうか。

横山 現状が、そこそこよいという状態が継続できているならそれでよいのではとも思います。制度化が悪いとはいえませんが、まちづくりにおいて、百点満点をキープしなければならないというのはしんどいことです。みんながそこそこ満足している60点でよしとして、その状態を楽しみながら継続できる知恵を出し合い続けるほうが重要です。仕組みづくりにしても、関わる人が楽に感じるように進めていくのがよいと思います。



田端氏



大谷氏

橋爪 関わる人の思いが大事ということでしょうね。例えば、分野を超えるのも「人」。総合的に考えるという場合でも、違う分野の人とつながっていくことで思いもよらない広がり生まれ、その中で持続力が生まれてくる場合もよくあります。

瀬田 都市再生やまちづくりに関する取材に行くと、地域の方々が最後に頼るのは地方自治体の方々。大学の先生なんかはあてにされていないということがよくわかるのです。そういう意味では、まちづくりの主体となるのは当然市民ではありますが、それをサポートしていく行政が果たす役割も忘れてはならないと思います。

大谷 第4分科会「観光・歴史・文化」では、よそから来た第三者がまちづくりにどう関わっているのかがそれぞれの発表の中でポイントとなっていたと思います。

私の専門は観光なので、歴史や文化については語れませんが、現代は、旅行が日常化し、情報もあふれ、何かすばらしいものを見て、涙が出るほど感動するという機会は逆に少なくなってきています。とくに観光に関しては、第三者が、第三者の視点でアイデアを提供し、仕組みづくりを提供していくような関わり方が今後重要になっていくのではないかと感じました。

橋爪 私は第三者として、中心市街地活性化で全国を回ってシンポジウムをしているのですが、なかなか盛り上がりません。やる気のある人がいても、なかなかまとまって街を盛り上げようというムードにならないのが悩みで……。特に、観光素材に恵まれているとはいえない中心市街地のまちづくりのヒントを大谷さんにぜひ教えていただければと思うのですが。

大谷 いくつか試してきたのですが、残念ながら成果がでていないものばかりで(笑)。ただ言えることは、身近な、ちょっとした違いによって、小さな喜びや感動が生まれることがあるということありますね。例えば、買い物のスタイルなど、ある世代にとっては当たり前のことが、別の世代にとっては新鮮に感じられたりするので。僕は団塊ジュニアの世代で、大型ショッピングセンターが当たり前のよう存在し、車に乗って買い物をする。商店街を歩いたという経験がほとんどないので。こんなささい



なことでも、違う世代の方がこんな暮らし方をしていたということを説明的に語ることで、感動にもつながる場合もあると思います。

橋爪 なるほど。長崎で成功した「さるく博覧会」のように、地域の人が従来の観光地以外のところを説明して回るコミュニティーベースのガイドツアーというスタイルが最近注目されていますね。地元の人が当たり前だと思い込み、意識していなかった魅力を、外から見た人が「これはおもしろい」などと指摘することも大事なことです。

横山 私は、住宅地等は必ずしも観光に結びつけなくても活性化すると考えています。たとえば、安全な道をつくるためにみんなで考え、いろんな世代や立場の人と話をすると、様々な物の見方に触れることができます。そこには新しい“気づき”があり、皆で達成する経験の積み重ねが大きな感動を生みます。今日の未知普請の活動の実践者の報告からは、そういう些細なふれ合い、心のふれ合い、昔は当たり前だったそんなことがすごく楽しい、と言う心の声が聞こえた気がしました。

瀬田 周りが良い人ばかりであればそういう感じになると思うのですが…。しかし、現実には地区同士の対立が激しいところもあり、難しい面もありそうです。さきほど田端さんが発言されたように、ある程度進めば、制度化も必要になってくるでしょうね。

橋爪 たとえば、観光で感動しようと思えば、事前にその場所の情報を頭に入れずに、現地の人のご案内に身を委ねるのもひとつの手です。ちなみに私はいつもそうしているのですが、予想と発見との落差が感動を生み出すことが多いんです。まちづくりにおいても、自分が関わったことで地域が少しでも変わったと確認したときに喜びを感じるのでは。時間的な差、情報の差など、落差をつくることで、新しい感動が生まれます。中心市街地でも、今まではこうだったけれど、こう変わったという差が見えてくると感動に結びついていくのではないのでしょうか。

田端 まちづくりと感動ということであれば、情念だけではなかなかうまく進んでいかない面もあると思います。経済学の立場から発言すると、感動を持続させるためには、きちんとお金が回っていく仕組みを作ることも忘れてはならないと思っています。情



だけに流され、感動を安易に追い求めた結果、かつて大量生産された郊外ニュータウンと同じような一種の画一化が起こってしまうのではないかという不安を感じます。経済学では、そもそも感動という「予想外」に起こる状況を想定していないのです。予想できる範囲で、得をするようにみんなが動くというのがわれわれの発想なのです。経済学的にも持続できる仕組みを作るということも必要でしょう。

瀬田 私は都市計画が専門で経済学は基本的に門外漢ですが、かねがね経済学には、時間の感覚と感動や魅力の概念が不足していると感じていました。昨今は、これらが取り入れられた経済学の研究も始まっていると聞いていますから、今回を機に、ぜひ田端さんにも取り入れていただきたいところですね（笑）。

大谷 感動という表現を安易に使うのは問題があるかもしれませんが、実際のところ、世の中でやりとりされるものが本当にお金だけで済むものなのかという疑問があるのです。

観光が活性化すると地元が経済的に潤うという考えが一般的ですが、実は究極の観光では、お金は落ちないんです。例えば、ホームステイや友達の家泊まれば、宿泊費や飲食費はかかりません。でも感動を味わうことはできるのです。

必要最小限の経費で旅をするバックパッカーが、今また世界的に大きなムーブメントとなっています。今回の発表を聞いて、彼らを受け入れる街づくりが日本でも芽生えてきたことを感じました。

橋爪 ところで、今回のパネリストのみなさんのなかでは、瀬田さんが関西に来て二年と最も日が浅いですね。関西の印象はいかがですか。

瀬田 驚いたのですが、東京に比べ、関西は非常に多様性があります。関西では、名前を聞いたことがないような街にも、かなり古い建物、長屋や町家が残っている一方で、新しい開発も進んでいます。多様性を存分に生かして、「うちはほかと違う」という街をどんどん作っていくべきだと思います。関西は、たとえば大阪の中でもどこの出身だというこだわりが強い人が多いですね。



橋爪 本日は、いろいろご意見をいただいた中でも、まちづくりは60点でいい、最初から百点満点を目指さなくてよいという横山さんの指摘にはなるほどと思いました。

また、本日のキーワードをひとつあげるとすれば「感動」ということになるでしょうか。属人的になりがちな活動をいかに持続可能な仕組みに変えていくかという課題と、関西にはやはり多様性があるということも確認できたと思います。つまり、まとめれば、多様性に富んだ関西で、「多様な感動」をいかに持続していくのが今後のまちづくりを考えていくうえで、重要になってくるということになろうかと思えます。

私の印象では、魅力的な活動には何かしら「限定」があるのです。地域づくりですから、どの場所で、どのメンバーで始めるかの限定が当然ありますし、今回の発表の中で「大阪ナイトカルチャー」という夜の時間帯に注目した取り組みのように、時間帯や対象を限定する場合があります。このように、限定したり、制限することで、逆に、従来のはとらわれない、いろいろな発想と展開が見えてくるということが、今回の16グループの報告からも見えてきた気がします。

さて、関西元気な地域づくり発表会は今回で二回目ですが、このような多くの方々の活動やアイデアを一度に知る機会は大変貴重です。このような場を持続的に、しかも多様性を持ちながら進めていくことが大事だということを最後のコメントとさせていただきます、第3部を終わりたいと思います。